GIHOKU KOUSEI HOSPITAL

病院の理念

1. 医療活動を通じ、健やかなまちづくりに貢献
2. 地域連携の積極推進により、利用者にとって最良の医療を実践
3. つねに病院運営の刷新を図り、「愛され、信頼される病院」を実現

岐北厚生病院　広報誌　2009 1.1発行

2009 冬号 Vol.39

39号目次

■年頭のご挨拶
■急性心筋梗塞について
■第14回 病院クリスマス会を開催
■風邪について
■外来診療担当表
■その他

年頭のご挨拶

JA岐阜厚生連
経営管理委員会会長
上松　忍

JA岐阜厚生連
岐北厚生病院
院長
山本　悟

新年あけましておめでとうございます。

皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は、本会事業につきまして、格別なるご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

平成２１年の年頭にあたり、皆様に一言ご挨拶申し上げます。

アメリカのサブプライム問題に端を発した金融不安から、昨年より世界経済は大幅に後退しており、日本経済も先行きは不透明な状況となっております。

また、医療環境においても少子高齢化が進み、非常に大きな変貌を遂げようとしております。特に、医療制度改革が行われている環境下において、医師不足が続くなか、「病院」「診療所」がそれぞれ独自の機能に合った運営を求められる時代となってまいりました。

昨年度の診療報酬改定では、産科・小児科診療の充実及び後期高齢者医療や在宅療養の推進に関わるもの、並びに７対１入院基本料他の見直しなどの一方、薬価や検査料の引き下げで、全体としては４回連続の引き下げとなっております。また、地域の中での各医療機関の役割や機能を県が策定する岐阜県保健医療計画も提示され、本会の運営にも大きく影響を及ぼすものと考えられます。

このように、医療を取り巻く環境が一層厳しさを増す中、病院運営はこれら困難な状況に対応していくことが求められております。本会としては、職員の専門スキルの向上などソフト面での充実並びに安全・高度・良質な医療を提供していくための施設設備及び医療機器の更新を引き続き行なうことにより、地域医療への貢献を推し進め、併せてコンプライアンス態勢等内部統制の強化に努め、皆様に信頼され求められる病院づくりに取り組んでいく所存であります。

最後になりましたが、本年が皆様方にとりまして幸多き年となりますよう心から祈念いたしますとともに、本年におきましても、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

平成２１年　元旦

新年あけましておめでとうございます。

皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

昨年はアメリカを震源とする金融危機による不景気感の浸透、更に締め付けがきつくなる医療費抑制政策、等々。私たち国民を取り巻く生活、健康への不安がつのる一年でした。

県下の医師不足は相変わらずで、そのため皆様方にも大変ご迷惑をおかけいたしますことを心からお詫び申し上げます。医師を始めとする医療スタッフの充実には今後とも尽力いたす所存です。

私どもは長年にわたって医療の質と安全の確保に努めてまいりましたが、この度日本医療機能評価機構の審査を受けその審査に認定されました。この基準はかなり厳しいもので、これに認定されましたことは皆様に安心して医療を受けていただける体勢が整えられてきたものと考えます。また認定看護師も誕生いたしました。今後も皆様から信頼される医療を提供できますように職員一同「医療の安全と質の向上」には鋭意努めてまいる所存です。

昨年から後期高齢者医療制度の導入、介護病床減少への方向など医療を取り巻く環境が一層厳しさを増す中ではありますが、私どもは地域の皆様の健康をお守りするという使命感を更に強く感じています。これからも近隣医療機関と連携し皆様に最適な医療を提供できるよう努めてまいります。今年も医療機器の整備だけでなく、皆様に信頼していただけるよう職員一同日頃から研鑽し、真心を込めて診療・看護ができるよう努めてまいりますので宜しくお願い致します。

最後になりましたが、本年が皆様方にとりまして幸多き年になりますように祈念いたしますとともに、本年におきましても引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

急性心筋梗塞について

内科医長
小野木　浩　人

急性心筋梗塞の死亡率は約20％とされ、その半数は発症数時間以内に集中しており、そのほとんどが重症不整脈によります。しかし、発症早期の段階で治療できれば死亡数を減らすことが可能です。このことからも急性心筋梗塞の症状が出てから医療機関を受診するまでの時間が重要となります。急性心筋梗塞の代表的な症状は「胸が痛い、胸が締め付けられる、重苦しい」などです。このような症状が数十分続く場合は急性心筋梗塞の可能性があります。数分で治まってしまう場合は狭心症（血管が詰まりかける）の症状が疑われます。たとえ数分で治まったとしても急性心筋梗塞の前兆である可能性もあります。残念ながら急性心筋梗塞には必ずしも前兆があるわけではありません。調査によると約50％の人にしか前兆がなかったと報告されており、半数の人は前兆なく突然発症します。前兆があり予知することが可能な患者さんは超早期の治療で生命予後も極めて良好となります。それでは、前兆のない人はどうしたらいいのかと申しますと、危険因子とされる糖尿病、肥満、高脂血症、高血圧、喫煙などのコントロール（食事、生活習慣、内服）が重要となります。これらを早期に発見、コントロールし、急性心筋梗塞を予防する他ありません。

さて、肋間神経痛～心筋梗塞まで胸痛には様々な原因があります。前述を踏まえて、もし、あなたが胸痛を自覚した場合、それが狭心症や急性心筋梗塞でないことを願いますが、狭心症や急性心筋梗塞だったらと考え、出来るだけ早く、かかりつけ医なり、近隣医療機関を受診して下さい。

万が一そうであれば、あなたの命は時間との勝負となるかもしれません。

14th 病院クリスマス会を開催

12月16日（火）外来待合ホールにて、クリスマス会が開催されました。今年で、14回目となりますが、今回は「みんなに愛のプレゼント」をテーマのもと開催されました。

クリスマスツリーなどで飾られた会場に、たくさんの患者様に集まっていただき、ポインセチアで囲まれた舞台では、高富保育園つき組ほし組のお友達によるお遊戯、NPO夢街道のみなさんによるハーモニカのしらべ、がちょうのみなさんによるオカリナのしらべ、岐阜北高校コーラス部のみなさんによるコーラスが演奏され、心温まるクリスマス会になりました。次々に演奏される童謡やクリスマスソングなどに患者様がリズムにあわせて体を揺らしたり、一緒に口ずさんでいる姿もみられ、美しい音色を思い思いに楽しんでいる様子でした。

また、入院患者様にサンタクロースに扮した病院職員によりクリスマスプレゼントとしてハンドタオルがひとりひとり手渡され、思わぬ訪問に患者様の顔から微笑みがこぼれていました。

風邪について

小児科外来
長屋　聡一郎（非常勤医師）

こんにちは。現在、当院では週二回の外来診察日ですが、地域の小児医療に少しでもお役に立てるように目指しております。

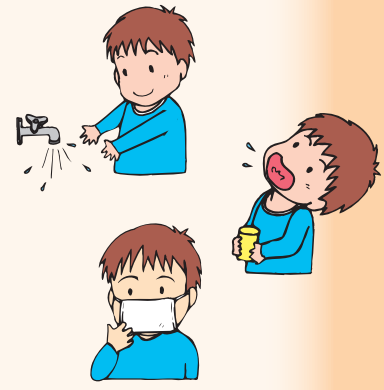
冬本番になってまいりました。風邪が流行する季節でもあります。

ところで、よく一般的に言われている「風邪」。医学的には“急性上気道炎”といいます。上気道と言われる部位、つまりのど、鼻に何らかのウィルス、細菌が付着して炎症を起こすと鼻水や咳、のどの痛み、発熱などの症状を引き起こしたものの総称です。上気道炎を引き起こす原因としては、全体の9割がウィルスによるものです。その種類は200種類以上あるといわれています。インフルエンザウィルス、RSウィルス、ライノウィルス、コロナウィルス、アデノウィルス、ノロウィルス、ロタウィルス、などなど。皆さんも一度は聞いたことがあると思います。

そんな風邪をひかないようにするためにはどうしたらよいのか。

まずは予防です。予防の基本は、「手洗い、うがい、マスク」です。また、環境整備も重要です。かぜのウイルスには乾燥を好むものが多いです。部屋は室度22～25度くらいに保温し、湿度は60～70%にしましょう。マンションなら濡れたタオルを2、3本干せばいいでしょう。アルコールジェルの携帯タイプなども売られています。小さなボトルなので携帯しておくと、手洗いできない場合にも簡単に消毒できて便利です。胃腸炎を引き起こすノロウィルスにはアルコール消毒はあまり効果がないようです。

アルコールで手荒れを起こす方もみえますが、保湿成分入りの商品もあるようです。



1)手洗い励行

基本中の基本、手洗いとうがいは大切です。 感染者の触れたドアノブであっても感染する恐れがあります。帰宅時、食事時だけでなく、マメにきちんと手洗いをしましょう。

2)マスク

冬場はインフルエンザの季節でもあり、人ごみではマスクをしたほうが安心です。

新型インフルエンザの流行が報道されれば、N95対応マスクの売り切れは必至です。

約7年前世界的に流行したSARSの時もしばらく売り切れ状態が続きました。あらかじめ入手しておくと安心です。

3)ゴム手袋

普段は必要ありませんが、使い捨てのゴム手袋を買い置きしておくと役立つ時があるかもしれません。汚染された吐物や便を処理する際に便利です。なお、吐物の処理は、塩素系の洗剤を使って拭くか、85度以上の高温で1分以上加熱すると良いそうです。

アイロンのスチームを使ったり、スチームクリーナーなどで消毒するのが良いでしょう

4)予防接種

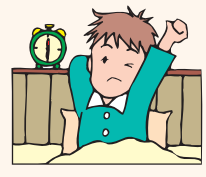
対応できるのは、インフルエンザウィルスのみですが、重症化しやすいといわれる乳幼児や高齢者に加えてその家族など接する方々は、あらかじめ予防接種をしておき感染拡大を防ぐことも重要です。

万全な予防をとっていても、風邪にかかってしまうことがあります。しかしながら、たいていのかぜは2、3日安静にしていれば治ります。かぜを治すのはあくまで人間の免疫力です。

かぜ克服三原則として

「適度な休息を取り、安静にする」
「睡眠を十分にとる」
「栄養をつける」

ことが大切です。



病院へ行くかどうかの判断の目安としては「発熱が3日以上続く」「吐き気や頭痛がひどい」「嘔吐が丸一日以上続く」「水も飲みたくないほど食欲がないのが続く」「緑色の鼻水や青いたんが出る」などは目安になります。

あわてて病院を受診する必要があるのは、意識が無い、痙攣を起こした、呼吸が粗く不規則であるなどの生命に直結した症状が出現したときであり、これは早く病院受診したから防げるものではありません。そのため、急な発熱、1-2回の嘔吐などの症状が出たのみであれば、自宅で様子を見ていても大丈夫なことがほとんどです。

風邪を起こす原因は、ほとんどがウィルスによるものです。抗生物質が効くのは細菌によるかぜのみであり大半の場合、効き目はありません。一昔前までは、細菌感染の可能性に備えて「念のために抗生物質を出しておく」ことが多かったですが、現在では風邪には処方されることが少なくなってきています。その理由として抗生物質が効かなくなる耐性菌が増えていることと、免疫系のバランスが崩れてしまうことが挙げられます。

実際に、抗生剤が多用される日本や台湾、韓国などで耐性菌の頻度が高く、抗生物質をあまり使わないドイツやオランダ、英国では耐性菌はほとんどみられないといいます。

また、厚生労働省は今年9月、市販のかぜ薬や鼻炎用内服薬などについて「2歳未満の乳幼児には飲ませるべきではない」と注意喚起しています。内服することによって、思わぬ副作用が生じて、症状を悪化させてしまう可能性があるからです。

正しい知識と予防を実践して、寒い冬場の生活を乗りきりましょう。
私たちはその手助けをしたいと考えています。